

# 令和7年度版「学力向上ポートフォリオ(学校版)」【南浦和小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	学力向上に対して一定の成果がみられた。次年度も「ドリルパーク」等を継続して活用し基礎・基本の定着や、一人ひとりの課題に合った学習にも取り組ませていく。教職員がさらに、積極的に1人1台端末を活用し、学びのポイント「し・しゃ・く」を意識した児童主体の授業を実践できるようにする。
思考・判断・表現	次年度も各教科の授業において、発表する場面をより多く設定していく。児童が主体的に表現を行えるように、ICT機器の活用も積極的に行う。学校全体で学び方を定着させていく。児童主体で振り返る(ルーブリック等)手立てについて共有を図っていく。表現力の向上、学習の振り返りについて、次年度の学校課題研修の柱の一つとして取り組んでいく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「言葉の特徴や使いに関する事項」 算数「数と計算」「変化と関係」 <指導上の課題> 児童が反復・習熟に取り組む時間が少ないため応用問題に対応できなかったためである。	⇒ R7年度は基礎学力パワーアップタイムを15分間とし、計画的に国語、算数を実施する。【毎週金曜日、朝の時間に実施】 「ドリルパーク」「スタディサプリ」等を活用した、漢字や基本的な計算等の反復・習熟の充実を図る。
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」 算数「図形」「変化と関係」 <指導上の課題> 自分の考えや思いを伝える場が不十分であるため。	⇒ 各教科の授業において、児童が発表する場面を多く設定する。協働的な学習の場面における 伝え合い等の基本的なスキルの指導を行うことで、思考力や判断力、表現力の向上を図る。【単元ごとに実施】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	R7年度は基礎学力パワーアップタイムを15分間とし、計画的に国語、算数を実施した。「スタディサプリ」や「ドリルパーク」を活用して一人ひとりの課題に合った学習に継続して取り組ませることができた。 「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」の質問項目では、肯定的な割合はR6に比べて向上した。
思考・判断・表現	B	協働的な学習の場面を取り入れた授業展開を行うことができた。ICT機器を効果的に活用し多様な意見の可視化や共有し学習に活かすことができていた。R7年度さいたま市学習状況調査「話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」の質問項目において、肯定的な回答の割合は95%であり、取り組んだ成果が表れている。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語の「言葉の特徴や使いに関する事項」や「情報の扱いに関する事項」、「我が国の言語文化に関する事項」の平均正答率において、3項目とも全国平均を上回っている。ただ、「情報の扱いに関する事項」の正答率が低いことから、目的に応じて図表と文章を結び付けて必要な情報を見付けることに苦手意識があると考えられる。 R7全国学力・学習状況調査の児童質問「学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っているか」における肯定的な回答の割合は、92%であった。ICTを活用した振り返りを充実させ、知識の定着と振り返りを次の学習に生かしていく。
思考・判断・表現	国語と算数ともに思考・判断・表現の平均正答率において、全国平均を上回っている。算数の「数と計算」「データの活用」の領域において課題が見られた。グラフから項目間の関係は読み取れるが、適切なグラフを選択し判断し、理由を記述する力や示された言葉を基に説明する力が不十分であると考えられる。思考の過程や根拠をまとめ、話し合いの機会を増やし書く活動も充実させていきたい。 R7全国学力・学習状況調査の児童質問「自分がどのように考えたのかについて説明をする活動を行っているか」における肯定的な回答の割合は、91%であった。相手に自分の考えを説明していく活動をより充実させていく。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	同一集団での経年比較により、国語、算数、社会、理科の知識・技能について改善が見られた。中学年では、2教科ほぼすべての項目で市の平均正答率を上回り、高学年でも4教科すべての項目で上回っている。国語「言葉の特徴や使いに関する事項」においては、一部課題が見られた。漢字の意味と文脈を理解し、正しく使い分ける学習を重ねていく。算数「数と計算」の領域において、基準量と比較量の関係に着目して正確に立式する問題の正答率が低く、数直線のかき方について発達段階に合った指導をしていき定着を図っていく必要がある。また、基礎的・基本的な知識・技能をより強化していくことを教職員間で共通理解した。
思考・判断・表現	同一集団での経年比較により、国語、算数、社会、理科の思考・判断・表現について改善が見られた。中学年では、2教科すべての項目で市の平均正答率を上回り、高学年でも4教科すべての項目で上回っている。国語「話すこと・聞くこと」においては、一部課題が見られた。各教科の授業において発表する場面をより多くしたり、異なる考えをもった人と話し合う場面を設定したりして、教科横断的に取り組み、思考・判断・表現の力を高めていきたい。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	B	基礎学力パワーアップタイムを計画的に実施することはできている。漢字や基本的な計算の反復、習熟を図ることができている。ICTを活用し、より一人ひとりに合った課題を設定していく必要がある。	変更なし
思考・判断・表現	B	各授業、児童が発表する場面を多く設定することができている。協働的な学習における伝え合い等の基本的なスキルの指導を継続的に行うことができていく。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)